まるちゃん

大沢　健太朗

色とりどりの花が咲く植木鉢の下に彼らはいた。足の数は全部で十四本。危険を感じるとすぐに丸くなる臆病な生き物だ。今日も彼らは薄暗い鉢の下で優雅に暮らしていた。食べては寝て、丸くなる。それが彼らの日常。

「やぁ兄弟！今日も元気そうだな」

「やぁ兄弟！君も元気そうで何より」

そして二匹は自分達の体を丸くくるめた。これは人間世界でのあいさつのようなものである。

「聞いたか兄弟。俺たちの兄弟がまた一人死んだらしい」

「それはまたどうしてだ兄弟？」

「人間のおぞましい霧の魔法だよ。そりゃあ哀れな死様だったらしいぞぉ」

人間……。それはだんごむし界一番の強敵であり、みんなが最も恐れている生き物だ。その生態は未だによくわかっていない。

「怖いなぁ兄弟。やはり住み家から出ないのが一番だよ」

「まったくだ兄弟。お互いに気を付けよう」

そうして兄弟のうちの一匹は餌を探し始めた。

「そういえば住み家の東に美味しそうな枯葉があったな」

この時彼はさっきの兄弟から聞いた人間の話などすっかり忘れていた。もう片方の兄弟も、自分が同じ話を何度もしているなど全く気付いていなかった。

やがて一匹のだんごむしが餌を求めて植木鉢の外へ飛び出した。彼らにとって一番危険な時は植木鉢の下から出る時である。人間に出会っても、丸くなるだけでは反撃のしようがないからだ。しかし腹が減っただんごむしに、そんな危険を考える余裕はない。

「うまい！」

そう言いながら落ち葉を食べていると、他の兄弟たちも餌のある場所に集まってきた。

「みんな、この枯葉は美味いぞ。やっぱり外に出るのが一番だ」

さっきの兄弟もやって来たようだ。

「まったくだ兄弟！」

次の瞬間、だんごむし達は人間の殺虫剤によって殺されてしまった。

「また兄弟が死んでしまった……」

その惨事を見ていたのはまたしてもだんごむし。しかし彼はほかのだんごむしとは一線を画した、ある特殊な存在だった。

彼が一線を画していたのはその寿命にあった。普通のだんごむしであればせいぜい二、三年生きれば良いほうだが、彼はもう三十年も生きている。何故こんなにも長く生きていられるのかは、彼自身もよくわかっていない。そしてもう一つ、彼にはほかの兄弟には無いものを持っていた。それはまるという名前。名付け親はなんと、さっき兄弟を殺した人間とだった。何故彼にまるという名前がついたのかは、今から二十五年ほど前にさかのぼる。

ある日一匹だんごむしが水たまりの中でおぼれていた。

「誰か助けて！」

そう叫んでも周りには誰もいない。もう死ぬ。小さい命が命の覚悟をした時、大きな物体が彼を水たまりからすくいあげた。助かった……ほっとしたのもつかの間、次の恐怖が彼を襲う。

「だんごむし！」

そう言って目をキラキラさせていたのはまぎれもなく、こどもの頃のあの人間だった。殺される。そう思った彼は、すぐさま体を丸くした。

「すごい！まるくなった！」

なんじゃこれこれ！とでも言わんばかりに、人間は素っ頓狂な声をあげて私を面白がった。

一方の私はいつ握り潰されるからない恐怖を耐え忍んでいた。しかし人間は私をじっと見つめるばかり。むしろ私の丸くくるまった体を物珍しそうに見つめ、手のひらのうえで転がし始めた。

三十年間生きてきて、あれほどの揺れを体感したのは一度きりである。

「くくくっ……」

人間は笑いながら、いつまでも私の丸い体を転がしていた。そしてずいぶんと時間が経った頃、私は植木鉢の近くに解放されたのだ。

「バイバイまるちゃん」

人間はそう言い残し、去っていった。私は巣に戻り、兄弟たちに全ての出来事を話した。しかし誰もその話を信じようとしてくれなかった。むしろみんなが私のことを馬鹿にして、私を兄弟ではなくまるという呼び名で呼び、からかい始めた。それ以来、私はずっと一人で暮らしてきた。あの人間に感謝しながら。そして彼の成長を見続けながら。

人間がだんごむしを意図的に殺すようになったのはちょうど私が二十歳の頃。我々だけではない。他の虫たちも、あの人間の手によって殺されている。なぜあの時私のような小さい命を助けてくれた彼が、我々虫たちを殺すようになったのか、私は長年生きて考え続けた。しかしもともと住む世界が違う生き物。理由など検討もつかなかった。

そしてある日まるは一つの決意をする。人間の住み家に行き、人間がだんごむしを殺す理由を突き止めるのだ。もう十分すぎるほど生きてきた。真相がわかれば死んでも思い残すことは無い。

一匹の勇気あるだんごむしが、人間の住み家へ向かった。
長年の観察によって人間の住み家への入り口はほとんど知り尽くしていた。またその入り口の周りに近づいてはならないことも、まるは知っていた。なぜなら住み家の周りで、一番兄弟達が殺されているからだ。
「一か八か……」
そう独り言をつぶやきながら、私は人間の住み家へむかった。未だかつてこの家に入っただんごむしの話は聞いたことがない。しかし自分が確かめなければ、兄弟達は永遠に殺されていく運命をたどるだろう。
中に入ると大きく開けた空間に出た。未だかつて見たこともない風景だ。どこに行けば良いのか見当もつかず、私はさまようがままにさまよい続けた。そうして数日後、私は人間に捕まった。
「だんごむし！」
大きな声を上げて人間は私を手のひらに乗せる。しかしあの人間ではない。顔は良く似ているが、体の大きさが全く違う。それはまるで、昔私を助けてくれたあの人間にそっくりだ。
「お父さん、だんごむしだよ」
「何でそんなもん家に持ってきたんだ！」
すぐにもう一人の人間がやって来た。あの人間だ。
「ティッシュで包んで捨てなさい」
「えぇ～家の中で迷子になってたんだよ」
「気持ち悪い！早く殺して捨てなさい」
少年の手のひらの上で、だんごむしはずっと丸くなっていた。
「いやだ、かわいそう」
あの人間は少し困った表情になる。そして少し経ってから。
「じゃあ外に捨てて来なさい」
そう吐き捨ててどこかに行ってしまった。その後は案の定手のひらで転ばされ、その後外に解放された。
結局真相はつかめなかった。あの人間はもう昔の人間ではなくなっていたのだ。しかし昔私を助けてくれた人間と、あの少年は同じ目つきをしていた。あのキラキラとした目は決して忘れることができない。嬉しいような悲しいような。そんな気持ちで、まるは自分の住み家に帰って行った。